その他の学術論文

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概　　要
『「自己革新」促進への取り組み』	単	1991 年 6 月	日本経営教育学会発表 （於；関東学院大学） 「日本経営教育学会年報」 第 10 号 （145～150 頁）	本稿は、人材開発論の観点に立って、その根本的課題の一つである組織に所属する職業人の自己革新促進のあり方について考察した。人間と機械との分業化が一段と進み、人間にとって創造性発揮の場がますます拡大し自律的に職務遂行できる人材の育成が急務になってきたからである。「持ち味づくり」のステップ、「隠し味づくり」のステップ、「自信づくり」のステップについてそれぞれ述べるとともに、環境整備の一つとして、人事・労務管理制度の構築について論じた。
『共働を推進するヒューマン・リソース・マネジメント』	単	1996 年 3 月	日本ホスピタリティ学会発表 (於；東洋大学) 日本ホスピタリティ学会研究報告「HOSPITALITY」 第 3 号 （30～36 頁）	本稿は、人的資源管理論の立場から、社会が評価する新たな価値を創造し発信する経営（パートナー・アクセス経営）を実現するためのヒューマン・リソース・マネジメントのあり方について考察することを目的としたものである。また、組織関係者の間に「相互主義」の考え方を媒介としたホスピタリティの具現化を目指す立場から考察している。パートナー意識･関係を創り出すために、「ステージによるマネジメント」「成果中心の評価」「ダイナミックな処遇」等について論じたものである。
『円卓発想による創造マネジメント』	単	1996 年 10 月	日本創造学会発表「第18回研究大会論文集」 （於；東洋大学） （102～106 頁）	本稿は、関係者間の相互交流、相互連携を重視する「ホスピタリティ」の考え方に立って、構造的な環境変化の中、組織マネジメント上、これまで築いてきた組織の「何」を変えなければならないか、の問いを設定し一つの解を導き出すことを目的にしている。本稿では、マネジメント活動の中に垣間見る「ブレイク･ダウン発想」を「円卓発想(Round-table Thinking)」に転換することを提言する。組織

				メンバーの創造性発揮を促し、現組織を「創造組織化」していく上で有効であることを実証的に論述した。
『ホスピタリティ・マネジメントと共働による人事考課』 (査読付き論文)	単	1997年3月	日本ホスピタリティ学会発表 (於;亜細亜大学) 日本ホスピタリティ学会研究報告 「HOSPITALITY」 第4号 (59～65頁)	本稿は、これからの人事考課について論述したものである。多くの組織が経営活動の焦点を「価値創造」に移しながら、同時に効率性を追求するという成長段階にあり、多くの場合これまでの成功体験が通用しなくなってきている。このことは、高度成長期に構築した人事制度と人事運用についても種々の改革が迫られていることを意味している。このような認識に立って、本稿は「いまから先を見て、これから必要になる人事考課の枠組みとは何か」という問いを設定し、その問いに対して一つの解を導き出すことを目的にして考察したものである。
『マネジャー育成に関する考察』 (査読付き論文)	単	1997 年 11 月	実践経営学会発表 (於;亜細亜大学) 「実践経営学会機関誌 通巻」 第34号 (195～199頁)	本稿は、人的資源管理論の中の人材開発論の観点から、社会的に存在価値のあるマネジャー育成の方策について、独自の調査に基づき考察した。経営環境が構造的に変化し、マネジャーが果たすべき役割が変化している。本稿は、いかなる組織においてもマネジメント機能は不可欠であるという認識に立ち、企業経営との関連でマネジャー育成の方向性とその内容について考察することを目的にしている。筆者が設定した「10」の仮説を検証し、情報創造者への転換などについて論述した。
『セルフ・マネジメントとホスピタリティ』 (査読付き論文)	単	1998年3月	日本ホスピタリティ・マネジメント学会発表 (於;産能短期大学) 日本ホスピタリティ・マネジメント学会誌 「HOSPITALITY」 第5号 (35～42頁)	本稿は、ホスピタリティの観点に立って、相互性の意味を個人の視点から捉え直し、セルフ・マネジメントのあり方を考察することが目的である。世界が一段と狭くなった大競争時代を迎えて、組織と個人が職務を媒介にして真に対等な関係を確立し継続的に相互成長してゆくアプローチについて述べた。すなわち組織としてマネジメント・システムやルールを再構築するとともに、個人として「自己傾注力」「相互交流力」「達成推進力」をそ

				れぞれ開発し、発揮すること、またそれらと成果主義の具現化との相関性について考察した。
『実践経営戦略の形成に関する考察』	単	1998年6月	実践経営学会発表（於；早稲田大学） 実践経営学会 第40回全国大会報告要旨 （34～36頁）	本稿は、ホスピタリティ・マネジメントの実際的な適用を求めて、円卓発想（Round-table Thinking）による実践経営戦略の形成アプローチについて考察した。円卓発想は、課題・目標の形成を中心として、情報創造することを意図したマネジメント発想である。その成立要件を明らかにするとともに、演繹的アプローチによる策定プロセスと帰納的アプローチによる実行プロセスとのダイナミックな相互影響関係、ならびにプラスの相乗効果について考察した。
『「目標による管理」に関する考察－地域社会の活性化に貢献する組織活動－』 （査読付き論文）	単	1999年3月	日本ホスピタリティ・マネジメント学会発表 （於；東海大学福岡短期大学） 日本ホスピタリティ・マネジメント学会誌 「HOSPITALITY」 第6号(26～36頁)	本稿は、人的資源管理論の視点から実態調査に基づいて目標による管理の現状把握を行ない、関係者間の相互作用を重視するホスピタリティ・マネジメントの視点から価値創造へ導く「目標形成」のあり方について考察するものである。すなわち目標による管理を導入することによって、いかに地域社会の活性化に貢献し自らの継続的な成長をも促すのか、またそのためにどのような思考で「目標」を形成していけばよいのか、一つの解答を導き出すことを目的にして考察したものである。
『ホスピタリティを具現化する人財に関する一考察』 （査読付き論文）	単	2001年3月	「長崎国際大学論叢」 第1巻（創刊号） （281～290頁）	本稿は、変革期にあって人的資源管理論の中の教育訓練・能力開発管理の観点から、関係者の相互関係を重視し相互成長を目的とする「ホスピタリティ」を具現化する人財とはどのような能力を備える必要があるのか、といった問いを設定し考察して、これから求められる人財像を明らかにすることが目的である。近年、成果主義の考え方へ一段と重点シフトし組織と個人の関係が変わり始めている状況において、問題提起する価値があると考えるものである。

『ホスピタリティ・プロセスに関する一考察(Ⅰ)』 (査読付き論文)	単	2001年3月	日本ホスピタリティ・マネジメント学会発表 (於　高崎経済大学) 日本ホスピタリティ・マネジメント学会誌 「HOSPITALITY」 第8号 (109～115頁)	本稿は、人間と人間の相互関係が希薄になっていく一方、組織と組織の相互関係は連携や提携の動きが加速化している中、ホスピタリティを実践するプロセスについて一つの解を提示することが目的である。一つの仮説として「3」のプロセスと「10」のステップを示し事例研究のアプローチによって検証するものである。(Ⅰ)においては、自己発揮のホスピタリティ・プロセスについて、すなわち「自発」「応答」「関係」の各ステップについてホスピタリティの語源を手がかりにして論述した。
『変化即応の目標による管理に関する一考察』 (査読付き論文)	単	2002年3月	実践経営学会発表 (於 九州保健福祉大学) 「実践経営学会機関誌」 通巻」第39号 (137～141頁)	本稿は、人的資源管理論の視点から、目標による管理が陥りやすい傾向を踏まえつつ、激動期における目標による管理のあり方について考察することが目的である。①構想を拠り所にする、②目標を共有する、③コンピテンシーを蓄積する、といった3つの観点から論じた。特に、外部志向でカスタマーからの要求にフォーカスすることが特徴である。当該事業はカスタマーに何を提供するのか、目指す成果は何か、何を成し遂げたいのか、どういうことで役立とうとしているのか、カスタマーから見た存在価値は何か、といった問いに対して明解に表明し共有するところに鍵があることを論述した。
『ホスピタリティ・プロセスに関する一考察(Ⅱ)』 (査読付き論文)	単	2002年3月	日本ホスピタリティ・マネジメント学会発表 (於 同志社女子大学) 「日本ホスピタリティ・マネジメント学会誌」 第9号 (167～172頁)	本稿は、第2のホスピタリティ・プロセスとして位置づける「親交促進のプロセス」について考察することが目的である。民間企業のみならず、国家行政においても成果主義の考え方を柱とする人事・給与制度等の導入が発表されるとともに、個々人の働き方やマネジメント・スタイル等についても随所に問い直しがなされているところであり、問題提起する価値があるものと考えるものである。親交促進のホスピタリティ・プロセスについては、「交流」「共感」「学習」「利得」の各ステップから成り、先の自己発揮のホスピタリティ・プロセスを伴いながら進んでいることが

				わかったところである。
『ホスピタリティ・プロセスに関する一考察(Ⅲ)』 (査読付き論文)	単	2003年8月	日本ホスピタリティ・マネジメント学会発表 (於　長崎国際大学) 「日本ホスピタリティ・マネジメント学会誌」 第10号 (147～153頁)	本稿は、第3のホスピタリティ・プロセスとして位置づける「達成推進のプロセス」について考察することが目的である。これまで2回の研究発表を通じて、いかにホスピタリティを具現化するのか、の問いを出し考察して、実践へ向けてのプロセス・モデルを明らかにしてきた。本稿で一応の完成を見ることになる。また、達成推進のプロセスについて論述すると共に、ホスピタリティについて定義した。
『ホスピタリティ・マネジメントの枠組みに関する研究(Ⅰ)』 (査読付き論文)	単	2004年3月	日本ホスピタリティ・マネジメント学会発表 (於 福岡市役所) 「日本ホスピタリティ・マネジメント学会誌」 第11号 (149～155頁)	本稿は、経営におけるホスピタリティ・マネジメントの理論的枠組みについて明らかにすることを意図し論述するものである。これまでの研究に基づいて、ホスピタリティの定義、ホスピタリティ・マネジメントの定義を明確にすると共に、ホスピタリティ価値を造語し意味づけて、サービス価値と明確に区別して位置づけたところである。また、ホスピタリティ価値を生み出すためのマネジメント課題を類別し明らかにしたところである。
『ホスピタリティ・マネジメントの枠組みに関する研究(Ⅱ)』 (査読付き論文)	単	2005年3月	日本ホスピタリティ・マネジメント学会発表 (於 日本大学短期大学部) 「日本ホスピタリティ・マネジメント学会誌」 第12号 (65～72頁)	本稿は、人間観の変遷について吟味するとともに、ホスピタリティ概念が想定する人間観を提起することが目的である。新たな 人間観の仮説、すなわち「価値創造人仮説」を提示した。また、この人間観に基づいて展開されるホスピタリティ・マネジメントはどのようなものなのか、ついても考察したものである。
『家族におけるホスピタリティ論考』	単	2005年7月	目白大学短期大学部女子教育研究所報 「目白大学短期大学部 女子教育」	本稿は、ホスピタリティの語源であるHOSPESが何を意味しているのか、何を示唆しているのか、現代社会に生きている私たちはどう受けとめる必要があるのか、また家族に適用するとどのようなことがいえるのか、について考察することが目的である。

			第 28 号 （42～49 頁）	
『ホスピタリティ・マネジメントの枠組みに関する研究(Ⅲ)～自律性と権限について～』 (査読付き論文)	単	2006 年 3 月	日本ホスピタリティ・マネジメント学会発表 (於　長浜バイオ大学) 「日本ホスピタリティ・マネジメント学会誌」 第 13 号 （75～83 頁）	本稿は、雇用価値のある人材、すなわち筆者の造語である「ホスピタリティ人財」および「価値創造人仮説」について考察し論述したものである。組織の中にあって自律性を発揮してゆくためにはどのようなことを考えなければならないのか、について問いを出し考察して、一つの解を導き出すことが目的である。とくに権限の視点から考察したものである。
『人的資源管理論の視点からホスピタリティを具現化する人材について』	単	2008 年 3 月	目白大学大学院経営学研究科ディスカッションペーパー No.　2 （全 20 頁）	本稿は、人的資源管理論の応用として位置づけるものである。現代社会の中で活動する企業にとって、求められる人材は自律的な人材である。このことを人的資源管理論とホスピタリティ理論の両面から論じたものである。「自律性」「交流性」「対等性」のキーワードを手がかりにして、教育訓練・能力開発管理にホスピタリティ理論を適用し論述したものである。
『日本におけるインフォームド･コンセントに関する一考察－医師を対象にした実態調査と今後の展望－』(修士論文) (査読付き論文)	単	2009 年 1 月	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科医歯科学専攻修士課程医療管理政策学(ＭＭＡ)コース （全 195 頁）	本研究は、東京医科歯科大学大学院修士論文として執筆したものである。インフォームド・コンセントを研究テーマにして、医師を対象にアンケート調査を実施し、日本におけるインフォームド・コンセントの実態を明らかにしたものである。本研究は、仮説発見型の研究として位置付けるもので、２つの仮説を導き出し開発したものである。相関分析、重回帰分析、クロス集計分析、χ２乗検定などの解析法を適用して分析し考察した。
『インフォームド・　コンセントのあり方に関する一考察－ホスピタリティ概念からのアプローチ－』 (査読付き論文)	単	2010 年 3 月	「目白大学経営学研究」第８号 （13～31 頁）	本稿は、病院経営の原点として位置付けるインフォームド・コンセントについて、サービス、及びホスピタリティ概念の両面から考察して、再解釈し再編集したものである。インフォームド・コンセントの理論編として著したものである。

『インフォームド・　コンセントの実施に関　する一考察－医師を対象にした実態調査からのアプローチ－』(査読付き論文)	単	2011年3月	「目白大学経営学研究」第9号 (25～52頁)	本稿は、インフォームド・コンセントの実践編として著したものである。本論文の目的は、医師を対象にしたインフォームド・コンセントの実態を調査し、仮説を発見することである。したがって、仮説発見型の実証的研究として位置付けるものである。研究方法は、アンケート調査法を適用した。相関分析、重回帰分析、クロス集計分析、χ２乗検定などの解析法を適用して分析したものである。本研究において、「診療に関する患者の自己決定の可能性」は「インフォームド・コンセントによる治癒効果」ならびに「インフォームド・コンセントによる患者の人生への影響度」にプラスに作用することが分かった。また、患者の態度がインフォームド・コンセントの効果に影響を及ぼしていることが分かったところである。
『医療におけるインフォームド・コンセントの研究』	共	2013年3月	日本経営学会 経営学論集第83集 データベース 自由論題 管理番号： JBM_RP83-E86-2012_F_65	インフォームド・コンセントは、医師が説明し患者が同意・承諾する過程で患者の自己決定を支援する概念である。医師がインフォームド・コンセントをどのように捉えているのか、についてアンケート調査を実施した。相関分析を行った結果、次の二つの仮説を発見した。第一の仮説は、「患者の自己決定が可能だと考える方が、病気の治癒効果に有効に作用すると考える。」である。第二の仮説は、「患者の自己決定が可能だと考える方が、患者の人生や幸せ(QOL)に＋の影響を及ぼすと考える。」である。主成分分析、ならびに一次元配置の分散分析とTukeyの多重比較検定によって、医師の一つの志向性、すなわち、ホスピタリティ価値を重視する志向と患者の自己決定を促す志向は医療成果(病気の治癒効果と患者の人生や幸せへの影響度)と関係があると評価され、上記した二つの仮説は検証された。 共著者：吉原敬典、高瀬浩造
『ホスピタリティ実践に関する研	単	2018年6月	日本労務学会	ホスピタリティを実践するとは、顧客から捉

究』			第48回全国大会研究報告集 (75-82 頁)	えた価値に手を打つことだとした。その価値は３つあり、「人間価値」、「サービス価値」、またこれからの重点としての「ホスピタリティ価値」についてそれぞれ検討し考察したものである。ホスピタリティの向上とはこの 3 つの価値を高めることである。一つは、経営の土台としての「人間価値」である。そして二つ目は経営の基本として「サービス価値」である。業務機能の標準化、マニュアル化、システム化、IT 化、ロボット化などが主たる方法である。第三は、組織の特徴を明示することによって競争力になる価値で、ホスピタリティマネジメントの重点としての「ホスピタリティ価値」である。